第3章

語法

第１節――実詞[1)]

１．名詞

［１］名詞の定義と語法上の機能

人物や事物の名称を表す単語を名詞という。古代漢語における名詞の機能は、基本的には現代漢語と同じである。つまり、文中で主語、目的語、連体修飾語となる。

●**君有疾、**

（君に疾有り）――『史記』扁鵲倉公列伝

●**人之陰陽、則外為陽、内為陰、**

（人の陰陽は、則ち外は陽為(た)り、内は陰為り）――『素問』金匱真言論篇

「君」は名詞であり、主語となる。「疾」も名詞で、目的語となる。「人」は名詞であり、連体修飾語[2)]となる。

古代漢語と現代漢語の名詞の機能には違いがある。現代漢語では名詞が動詞として使われることはないし、直接に動詞を修飾して連用修飾語[3)]となることもないが、古代漢語においては、名詞は述語になれるし、直接に動詞を修飾して連用修飾語にもなれる。これは古代漢語に特有の語法現象であって、通常これを名詞の転用という。

［２］名詞の転用

古代漢語でも現代漢語でも、単語はみな品詞に分けることができる。１つの単語は一般に固定した１つの品詞に所属する。たとえば「火」「日」は名詞に属す。ところが、次の例文のように、文脈によっては動詞に転用されることがある。

1）実詞は、単独で文成分に充当でき、また単独成分となることのできるもの。名詞・動詞・形容詞・数詞・量詞がこれに属す。虚詞は、単独では文成分になることができず、ただ語法上の機能を果たすもの。代名詞・副詞・前置詞・接続詞・語気詞がこれに属す。この分類については諸説あり。

2）修飾語のうち、とくに体言（主語や目的語となれるもの。名詞・代名詞）を修飾するもの。本書では中国語の「定語」の訳語として用いる。

3）修飾語のうち、とくに用言（述語となれるもの。動詞・形容詞）を修飾するもの。本書では中国語の「状語」の訳語として用いる。

●**三里火之、**

（三里、之を火（や）く）――金・張従正『儒門事親』巻１指風痹痿厥近世差玄説

●**必日之而後咀、**

（必ず之を日（さら）して後に咀（くだ）く）――北宋・沈括（しんかつ）『良方』自序

こうしたある品詞を臨時に別の品詞として用いることを品詞の転用という。古代漢語における名詞の転用には、おおむね２つの状況がある。

名詞を動詞に転用する

●**天地気交、万物華実、**

（天地の気交わり、万物華（はなさ）き実（みの）る）――『素問』四気調神大論篇

「華」「実」は本来名詞であるが、この文中では転用して動詞となり、述語として用いられている。花が咲き、実を結ぶ、という意味である。

●**虚邪不能独傷人、必因身形之虚而後客之也、**

（虚邪 独り人を傷（やぶ）ること能わず、必ず身形の虚に因りて後に之に客（かく）するなり）――『霊枢』[4]

「客」はもともと名詞であるが、この文中では転用して動詞となり、後ろに目的語「之」を伴って、「侵入する」という意味となる。

●**今夫蔵鮮能安穀、府鮮能母気、**

（今夫れ蔵 能く穀を安んずること鮮（すく）なく、府 能く気を母（う）むこと鮮なし）――劉禹錫（りゅううしゃく）「鑑薬」

「母」は転用して動詞となり、「生み出す」という意味となる。「気」はその目的語である。

●**〔鯪鯉〕形似鼉而短小、又似鯉而有四足、黒色、能陸能水、**

（形は鼉（だ）に似て短小、又た鯉に似て四足有り、黒色、能く陸し能く水す）――『本草綱目』巻43 鯪鯉（りょうり）

「能陸能水」とは、陸上でも活動できるし、水中でも活動できるということである。

●**痹病以湿熱為源、風寒為兼、三気合而為痹、奈何治此者、不問経絡、不分臓腑、不弁表裏、便作寒湿脚気治之、烏之、附之、乳之、没之、種種燥熱攻之、中脘灸之、臍下焼之、三里火之、蒸之熨之、湯之炕之、**

（痹病は以て湿熱を源と為し、風寒を兼と為し、三気 合して痹と為る。奈何（いかん）ぞ此れを治する者は、経絡を問わず、臓腑を分かたず、表裏を弁ぜず、便（すなわ）ち寒湿脚気と作（な）して之を治す。之を烏し、之を附し、之を乳し、之を没し、種々の燥熱之を攻め、中脘之を灸し、臍下之を焼き、三里之を火し、之を蒸し之を熨し、之を湯し之を炕す）――金・張従正『儒門事親』巻１指風痹痿厥近世差玄説

「烏」は「烏薬（うやく）」、「附」は「附子（ぶし）」、「乳」は「乳香（にゅうこう）」、「没」は「没薬（もつやく）」で、いずれも名詞であるが、ここでは後ろに目的語を伴って動詞として用いられている。同様に、「火」「湯」「炕（こう）」も名詞であるが転用して動詞になっている。

●**汗出多者、温粉粉之、**

（汗出づること多き者は、温粉もて之を粉（はた）く）――『傷寒論』太陽病第38条

もし汗の出かたが多ければ、体に温粉（おんぷん）（薬物をすりつぶして細末にしたもの）をはたいて汗を止める。後ろの「粉」は動詞として用いられている。

名詞が副詞に転用され、連用修飾語となる

現代漢語では、名詞を連用修飾語とするためには、まず前目フレーズ[5]を作らねばならず、そうしなければ動詞を修飾することはできない。たとえば、「把書拿来（本を持ってきてください）」の「把書」は前目フレーズであり、述語「拿来」の状況を説明していて、ひとまとまりのフレーズとして文中の連用修飾語の役割をはたしている。古代漢語では、名詞を連用修飾語として用いても通常は前置詞を必要としない。

古代漢語で名詞が連用修飾語となると、以下の３つの意味をあらわす。

1 比喩を表し、「～のように」「～に似て」などを意味する。

●**是以古之仙者為導引之事、熊経鴟顧、引挽腰体、動諸関節、以求難老、**

（是（ここ）を以て古の仙者は導引の事を為し、熊のごとく経（た）ち鴟（ふくろう）のごとく顧（かえり）み、腰体を引挽（いんばん）し、諸もろの関節を動かして、以て老い難きことを求む）――『後漢書』華佗伝

「熊」と「鴟」は名詞であるが、この文中では動詞の「経」と「顧」を説明して連用修飾語となって、「熊のように直立し、鴟のように顧みる」という意味を表している。

●**寒則虫行、熱則縦緩、不相乱也、**

（寒ければ則ち虫のごとく行き、熱ければ則ち縦緩（しょうかん）し、相い乱れざるなり）

――張従正『儒門事親』巻１指風痹痿厥近世差玄説

「虫行」とは虫のように爬（は）って行くという意味である。

●**卒風暴起、則経水波涌而隴起、**

（卒風暴かに起これば、則ち経水 波のごとく涌（わ）き隴（おか）のごとく起（た）つ）――『素問』離合真邪論篇

4）原書は出典を『霊枢』とするが、対応する文章は見当たらない。

5）前置詞（介詞）と目的語（賓語）の組み合わせで構成される語句。本書では中国語の「介賓詞組」の訳語として用いる。